

教職の魅力伝え、実践的な力を育む

准教授 五島 浩一

「教職の授業を受けるたびに迷うんです。」

教員免許状を取得するために教職課程を履修している理学部の学生が発した言葉である。話をしてみると、教員免許状の取得は目指しているが今のところ教員になるつもりではないとのことであった。それなのに、授業を受けて教職の世界に触れるたびにその楽しさや魅力を感じ、教員になるのも悪くないかもしれないと思うらしい。そんな声を聞くと、そっと背中を押してあげたい気持ちになる。

一方で、「教職の授業を受けるたびに迷うんです。」という同じ言葉を、違った意味で耳にすることもある。子どもの頃から教員になりたいと思っていて、その夢をかなえるために教育学部に入学し今まで学んできた。大学の授業を通して教職について知れば知るほどその難しさや大変さがわかり、自分には務まらないのではないかと不安になっているとのことだ。追い打ちをかけるように、教員の勤務状況が問題視されメディアで取り上げられる機会が大変多くなり、さらに不安を大きくしているようだ。

教職の魅力は、子どもたちとの関わりからたくさんの感動をもらえることだと思う。他人から見れば他愛もないことかもしれないが、子どもとの関係の中に生まれる日々の小さな感動が、子どものためならば労を惜しまず仕事に取り組む教員の原動力になっているのではないだろうか。教員になりたいという夢をもって大学に来た学生たちに、少しでも教職の魅力を感じさせてあげたい、教員としての実践的な指導力を育めるような手助けをしてあげたいという思いが強くなる。

それを具現化する機会のひとつとして、私が担当している授業に「教師の資質と教職設計」というものがある。その授業について簡単に述べてみたい。

金曜日の5限目という1週間の最後に位置づいている授業である。本来であれば週末の夜を友と楽しみたいところだと思うのだが、熱心な学生たちが多く集まり学び合っている。3年次の後期から4年次の前期にかけて学生たちにとって目の前に迫っているのは教員採用試験かもしれないが、決してそれはゴールではない。そこで、目の前の試験ではなくその先の教員としての人生を見据えながら、より実践に即して学べるようにすることを目的とした。

授業で大切にしていることは「自分で調べる」と「対話する」ことである。まず事前に課題を提示し、その課題に取り組むために自分で資料を探し調べることを義務づけた。与えられた学習ではなく、学びを自分事にしたいためである。次に、授業の中では学生同士が議論する場や協力して何かをつくる場を設け、対話を重視した。学生たちは対話を通して深く考え、他者の考えから自分の考えを再構築することによって学びを深めていっている。それだけではなく、過程、コース、選修を超えた学び合いを通して、同じ夢や目標を持つ仲間づくりにもつながっていると感じている。この授業でどれだけ学生たちの不安を軽くしてあげられたか、実践的な力を育んであげられたかは定かではないが、実践的な内容について仲間と議論し合うことで、教員になることへのモチベーションが高まったと話す学生は多い。

これからも様々な機会を通して、教師を目指す学生たちを支援していきたい。